

「ヨーロッパの幼稚園」

リヨンで見た言語教育



村 石 昭 三

私たちがおもに訪れた先はリヨン(仏)とフランクフルト(西独)の幼稚園であった。リヨンの方はおもに教育内容を中心に、フランクフルトの方はおもに宗教教育を中心にした見学であったから、私の専門からして、リヨンでみた言語教育について述べようと思う。

私たちは滝沢武久氏(電通大)にすっかりお世話になりながら、幼稚園を見てまわったが、リヨンで得たことは、子どもに対することばのしつけがきびしくて、おまけに目課が言語、数を中心がちり組まれていたという面である。暗唱、朗読を中心に言語の教育が進められ、文字は書くことからはいって、読む指導にはいるのが五歳で行なわれていることであった。見ている肩がはる思いがするときもあった。ところが絵本の指導

がほとんど見当たらぬことは、いささか拍子抜けしたりもした。それでこれらのできごとにどう脈絡をつけるかに、私の見た「ヨーロッパの幼稚園」見学は終始してしまつたようだ。

1 暗唱と朗読

最初に訪れた園は静かな高台の団地の側にあつて、フージェール幼稚園といつた。四歳クラスで人形劇を先生がやってみせていたが、一区切りしてから、子どもたちに一人ずつ、その劇の一小節を暗唱させはじめた。教師は腰かけ、子どもが暗唱するとき、手をしっかり握つてやっていた。その子は握られた手に助けられてか、おそい口ぶりではあつたけれど、つかえ、つかえしながらも暗唱し終えた。そして、「ボン」という教師

の声に、満面に喜色を走らせた。

どの園でも、五歳クラスでは教師が短い文や文章を板書し、それを朗読または暗唱させていた。ジャガール幼稚園では、花をテーマにした単文で、次の詩があった。

ひなぎくよ

お前は美しい

お前の花びらは

蝶の羽のように

うすい

ベーズ幼稚園には「星の王子さま」の作品の一節もあり、モッパッサンのことばも板書されてあるのを見たりした。

日本でも幼児に詩を読んで聞かせようということがいわれている。日本的にはたいへんロマンチックな発想で、しかも詩だけをとりあげる風潮にあるのだろうか、ここではだいぶ違っている。リヨンの幼稚園の場合には、いきなり詩にははいらない。花の詩にはいきさつは、まず、月間テーマに花というのがあって、花の絵をかく、製作をする、また自然観察の諸活動の一つとして、花をうたった詩が与えられ、暗唱・朗読をするわけである。いわば、その単元テーマの象徴（シンボル）活動として、特定の文章の暗唱、朗読があるのであって、その文章は

詩であろうと、散文であろうと別にかまわないわけである。フーリエール幼稚園の人形劇の例でも、その劇のシンボルとするにふさわしいせりふなり、地の文が暗唱されていたのである。

子どもはよく童話を聞いて、即興的なせりふや身ぶりをしてみせるが、それをきちつとことばに換元させるところにフランスの教育の特徴がある。現代数学の集合遊びで、特定の形・大きさ・色の積み木をとる場合も、いちいちその属性を口でいわせていた。一度はことばに換えさせて、ことばに換元できることが認識なのだと考えるようだ。

ことばに対する愛着をもち、ことばのしつけを重視する国民、そしてフランス語の栄光を感じ、それを子どもに語りつこうとするのがフランス人である。美しいことばは口に、そして楽しいときに口ずさむのがシャンソンなのかと思ったりさせられた。美しいことばは口ずさもうという言語習慣はよいものだなと思ったりもした。

暗唱・朗読にはもう一つ、それによってフランス語の文法、構文をきちんと子どもに入れるための学習法として成立することにも注目したい。とりわけ、散文の板書したのを朗読することとは、このねらいと結びつけないと納得がいかない。

要するに、幼児のうちから、ことばはきちんと入れなければ

いけないという考えに貫かれているようだ。ことばをとにもかくにも正確に使わせることが、ことばを大きくなって考える道具とする上で、大変重要なことだと思っっているらしい。日本のように、ことばの使い方は多少はいい加減にしておいても、子どもの発想の方を大事にするのとは根本が違っている。一つ一つのことばの使い方をルーズにさせたまま、大きくなってどうしてことばが考える道具として通用するのか、フランス人にはさぞ不思議なことであろう。

2 文字の読み書き

文字は五歳児からの保育内容にはいつている。リヨン教育センター近くのジャンドラ・ホンテ幼稚園で、私たちの仲間が日本の絵本を先生にあげたら、早速少し年とったその教師は黒板に「私たちは日本の紳士から、たいへんきれいな本をもらいました」という書き出しで数行にわたって板書をした。教師がゆつくりと読み、あと数人の子がかわるがわる立って読んだ。そして、その後は、その文章を使って、同じ音（日本のかな文字に相当する音節）の抽出にまで発展させるなど、たいへん手なれた感じであった。

どの園でも文字はとり扱っていたが、そのやり方をみていく

と、次のような指導過程があることがわかった。

- (1) 教師の範読（板書した文章や詩について）
- (2) 幼児の読みや暗唱
- (3) 同じ音節の抽出
- (4) 能力別の学習作業

上グループ 板書文の聴写や構文練習

中グループ 板書文の一部または全部の視写

下グループ 積木や絵カードによるレディネス作業

およそ日本の幼稚園にみるような、室内、園庭などに幼児名、植物名などの「標識いっぱい」という風景は見られなかった。

それはそのはずである。そのような文字の扱いなのだから、わざわざもってまわって文字環境などといわなくてもよいからである。

「なぜ、文字を教えるのか」というのは、私たちがいつも用意した問いかけであったが、必ずしも確答は得られなくて、もどかしかった。ただ一つ、はっきりしたことは、知的な教育に文字が必要だとか、文字を教えないと小学校の教育についていけぬとか、親がうるさいからというのは彼女らの口からは何も聞かれなかったということである。そこには、日本的な文字教育にみられる熱っぽさはなかった。なぜ、日本の一部分にお

いてはこんなに熱っぽくなっているのかと考えると、幼児に對する文字教育の禁令（？）という思いすごしのせいか。あるいはかな文字を知ればただちに文章の読みにはいれるという、文字功徳を知りすぎたためであろうか。

要するに、フランスにおいては、文字というものはじめからきちんと覚えさせるといふ点では、話しことばの発音と同じく考えなのである。同じ単語や自分の名まえを何回も時間をかけて書かされている姿はいたいたしげに見えたが、このことはおそらく、最初からことばはきちんと教えるものという、この鉄則のもとに文字も正しく教えることに結びついているようである。この鉄則の前にはことばも文字も分けへだてないようだった。

ただ、日本の一部の運動家のように、一字一字の読み書きを教えるだけが文字指導だと考えるのとは違っていた。暗唱、朗読と同様に、ある単元テーマにそつた活動があつて文章が板書され、それを文字のレベルにまでおろしてやるという扱い方であつた。

きちんと読める前から、書く活動があるのが珍しかったが、これは一種の線書き遊びであるし、暗唱と同様な考えによる視写だと思えばよいであろう。日本的な発想だと、幼児には日常

書く生活やその機会が少ないのだから、書くのは必要なく読みだけでいいのではないかということになるが、ここでは文字をきちんと覚える手だてとしてまことに重要であつて、書く活動を生活にまで反映させるといふ考えはもともたないようであつた。

3 ことばのしつけ

ところで午前のこうした保育を見ながら、一つは幼児がこの活動に堪えられるように、そのもとなるしつけがうまくいっていないとだめだということ、そこまで徹底させる信念がないな何かがなくては成立するまいということが思われた。

子どものしつけ方はどこの園でもきびしかったといえよう。子どもが暗唱するときは、回りの子どもたちは私語することを許されず、少しでも何か口にしようものなら、ただちにシーツという声と、口を手でタテ十字に切るきびしい表情の教師の顔があつた。おそらく、これだけのきびしさがなければ上述の言語教育はうまく行なわれないだろうし、逆にいえば、きびしいしつけと発音、文字を正確に教えていく教育内容とがきびしいという点で符号するのだと思われた。

もっとも、それは幼稚園できびしくしつけるといふよりは、

私の印象では、教師がそういう態度で臨みうる何かが子どもの側にもつくられていて、その上で当然のごとく行使されているとみられた。その当然さというのは家庭教育のしつけの厳格さというものに違いない。この点、家庭をのぞかなかつた私にはよくは分からないけれど、ただ、バスの中で絶対に大声でしゃべることのない市民生活を目にしながらも、そういう家庭教育のしつけの一端というものをかいま見るような思いがした。

日本の幼稚園が家庭のしつけまでしょいこむ形になっている機能をもつかぎりは、しつけのきびしさを前提にした「冷えた保育」は不可能であるし、本来、子どもには甘く対する日本の生活習慣があるかぎり、保育のしかただけ変えてもそれは筋違いというものだと思われた。

リヨンの幼稚園のしつけのきびしさにくらべて、フランクフルトの場合はだいぶ日本的であった。自由であった。たまたま見かけたことであろうが、ある幼稚園で子どもに話を聞かせていた。そのとき、ある子はキャンディをなめなめ、ある子は机の上のって話を聞いていた。それを教師は少しも注意しなかったのである。さっそく、これが私たちの質問の矢表に立たされた。ああいうことはいいことかと尋ねると、その教頭先生は、いいとは言えない。しかし、それを幼稚園は家庭に注意

をすることはできるが、直接のしつけは家庭の仕事であって、幼稚園ではないと割り切っていた。これをドイツ風の割り切り方というものかと思つた。

割り切り方といえば、文字のことを尋ねたら、これは小学校でやることだと言う。子どもが字を知っているのに教えぬのを変に思わないのかと尋ねたら、逆に小学校でやるものをわざわざ幼稚園でやろうとするのはどういふことかとひどく不思議がつていた。

しつけについて今一つ指摘したいのは、リヨンの幼稚園のきびしさは午後の保育をみていると日本的な意味でのきびしさとは少し違うように思われた。リヨンの幼児教育には何か「時間をかける」ということの重みを感じた。絵画製作でも子どもに一週間も、もっと時間をかけて同じ絵、同じものをつくる仕事を続けさせるのだったが、伝統を伝える、文化を継承するいなみとしての教育は、人間がいかに幼児のうちから、「時間をかける」こと的生活態度をしつけの基本にしみこませているようだった。時間をかけるということは、人間の歴史を教えることにつながるともいえるであろうか。

4 絵本

もう一つ、不思議に思ったことは、二週間余りも幼稚園をまわりながら、絵本を扱う場にはほとんど出合わなかったことである。フランクフルトの幼小一貫教育をしているリンネ・シューレでだけ、「ピーターと狼」の絵本で、教師がその文章に合った調子で読み聞かせたすばらしい場面に合ったがそれだけであった。日本のように保育絵本という商業ベースの伝統がなかば公式化した姿に見なれた者にはどこかさびしい感じさえしたが、少なくとも次の点は重要なことだと思った。

もともと、絵本は子どもが各自で午後の自由な時間に見るか、あるいはたまたま教師がストーリー・テリングのときに使うときのほかは必要でないのである。それに最も重要な事情だと思つたことは、リヨンの場合言語教育が言語そのものの構造の学習に中心があつて、話す聞く言語活動の教育がないか、あるいは非常に乏しいという事実である。昔のある時代の日本の言語教育が童話を聞かせるだけ、あるいはことばづかいを矯正することだけを考へていたときがあつたように、リオンでは家庭のしつけによつて、正しいことばと文字とだけ教えるのが言語教育だというような進め方をしてゐる。いまの日本の場合は、言

語活動中心の言語教育である。聞く、話す、また絵本を見るといったことばの諸活動を通して、たとえば知的能力や社会的発達をはかるとか、言語能力的にいえば、ことばを通して、ものを知り（認識）考へ（思考）伝え（伝達）そしてつくる（創造）という能力を身につけさせ、そして、その活動に正に適うだけの日本語の構造を身につけさせようとするわけである。それにとばのしつけまでしようとするわけだ。これが日本の言語教育であつて、フランスの場合は、ことばのしつけの上に、ことばの構造要素の指導が位置づけられているのであつて、日本のような多様な言語活動の教育というものをリオンでは見ることができなかった。

それはちょうど、ラテン語の教育が今もつて小学校で行なわれなければならないと考へる古い考へ方がまともに受けとられるとともに、一方の進歩派はルーシェットプランという改革案で言語活動の教育を主軸にしようとする運動があるようだが新旧のこの交錯のなかに「病める言語教育」の病根を見た思ひだつた。

5 ことばとは何なのか

では、何ゆゑに、幼児のことばの教育に、リオンではこれほ

ど言語そのものの構造要素の教育を大事にしなくてはいけないというのであろうか。

第一は伝統なり、文化の継承のために言語教育を位置づけていくということにある。それがフランスの言語教育だ。ところがフランクフルトの場合には、急激な経済の発展と繁栄のあまり、教育の使命は変貌するに違いない未来社会に適合できる子どもを作るために、教育はどうあるべきか、言語教育はどうあるべきかということが課題になっている。フランスの場合には、未来社会というよりも、伝統文化を、歴史を、その栄光をどのようにに継承させるかという点に教育のはじまりがあるという発想に立っている。伝統と文化の継承はまさに言語教育の責任なのである。

第二はフランス語を伝えるという、極端なまでの母国語に対するエリート意識があることである。言語は伝統、文化を語りつぐ道具であるとともに、文化の形象そのものが言語であるという考え方である。日本的な発想からすれば、言語は思想・思考を伝える道具なのだけでも、フランス的な発想では思想・思考の様式を決めるわく組として言語があると考えているようだ。この点、私たちは言語教育でことばを思想・思考を伝える道具として、それがうまく使いこなせるようにということをや

期待したのだけでも、根本的に、日本人の思想・思考のわく組を実は日本語が決めているのだ。日本語でしか日本人は考えることができないのだという原点を確認しなければならなかったのではないかということを思う。

第三の問題は、ヨーロッパという隣国と地続きで相接する国が互いに自衛としてもち続け得ることは、その国の言語だけだということがある。ここには他国と自国を俊別する独立と排他主義が国民の意識として根底にあると思われた。フランクフルトでは西ドイツの伝統的な家庭教育を乱すのは外国人労働者だという考え方もあると聞かされた。「一クラスの中でひとりひとりの幼児の髪の毛が違う、この幼児たちに教える、いや、教えなければならぬことといえば、フランス語の教育なのです」と説明してくれた教師のことを思い出し、その教育の中に国民の民族意識に貫かれた何かがあるのを感じるのであった。

ヨーロッパはまことに狭い。飛行機でひとたび舞いあがれば、そこは他国の空だという感じがしたが、そんなところでの国の烙印はもはや言語だけしか求められないというのであろうか。

(国立国語研究所)